



京都教区ビジョン宣言文

主題 社会とともに歩む教会

カトリック京都司教区

本文

大テーマ(目標) 「社会とともに歩む教会」

教会は「社会とともに歩むもの」と、私たちは考えます。

かつて、教会は世俗社会とは、全く対立するもの、と考えられたことがありました。

しかし、人々の生きている場こそ、この社会であり、教会はこの社会のただ中にあります。

私たちは、この社会のあり方に迎合するのではなく、社会の中、人々の中にある福音的なものを、キリストのメッセー
ジ、みことばの種として受け入れ、それに協力すること。その反面、社会の中にある非人間的なもの、福音の精神に反す
るものに対しては、はっきり声をあげ、賢明にこれを糺すことが必要であるといえるでしょう。

そして社会の必要としていることに耳を傾け、福音の精神をもって、これにこたえていきましょう。

以上のことを踏まえた上で、以下の観点から訴えを試みたいと思います。

I、「社会に対して、教会はどのようなかわりを持つようとしているのか」

答えは、次のことばに要約されると思います。

「社会のそれぞれの場で働いておられるキリストを見出していこう」そこで、

(1) 私たちの信仰を、自分の召されている場(職場、学校、家庭、地域、病床等)で、毎日のおもい、ことば、行ないの積み重ねを通して、探求し、表わしましょう。

(2) 社会において、「弱い立場」におかれている人のことを、私たちは余りにも知らなすぎるのではないでしょうか。貧しい人、苦しむ人（障害者、病人、被差別部落の人、在日アジア諸国の人々等）の実情、彼らが置かれている環境、願いを知り、さらに継続した真剣なかかわりを求め、同じ仲間として学び、支え合っていきましよう。

II、教会は、自己刷新なしには、十分にその使命を果たすことはできない。

(1) その刷新の第一は、対話における自己刷新であります。

他の人々のことばに耳を傾け、自分を変える勇氣を持ち、愛と正義に基づいた真の対話をすすめていきましよう。

そこで、信仰の根本である神との対話（祈り）を深めましよう。

教会の中で、お互いに尊敬と信頼にみちた対話の実行に努力しましよう。

肩書きにこだわらず、また、利害関係をこえた対話をすすめましよう。

さらに教会の外部との対話を忘れないようにしましよう。

(2) その第二は、開かれた共同体作りへの努力であります。すなわち、だれもが受け入れられ、そこで本当の対話ができ、さらに、それが社会とともに歩むものとなるようにつとめましよう。

そのために、今の教会のなかで福音的でないものを改める勇氣をもち、福音的なものを育む努力をしましよう。

したがって、教会が単なる仲よしグループに留まらないように、今ある教会の色々な行事を見直し、もっと社会に開かれたものとしていくように工夫をこらしてみましよう。

教会の中の人間関係を見直し、信徒同志、司祭同志、また信徒と司祭間などで、主において互いに成長させていただき、福音の実現に向けて励まし合うような関係を、一層築いていきましよう。

信徒、青少年、修道者、司祭等の主体性を尊重し、その役割分担をはっきりさせるようにつとめ、その責任と使命の自

覚を深めましょう。

一人一人が生きている場を大切にし、よりよい人、すばらしい共同体を、信仰に基づいてつくるようにいたしましょう。

(3) 刷新の第三点は、典礼についてであります。

私たちは個人的な祈りを大切にしながらも、第二バチカン公会議を通して示された典礼の共同体的性格を、新しい流れとして育てていきましょう。

そのため、ミサを中心とした典礼を自分のものとするような工夫と教育を、常に考えましょう。

また、典礼におけるそれぞれの役割を話し合い、共同体意識を高めましょう。

(4) さらに、共同体の一致の基礎であり、原動力となる祈りと諸秘跡を大切にしましょう。

Ⅲ、「信徒自身の自己刷新こそ並行して深めるべき急務」

教会自身の自己刷新は、信徒個人の自己刷新によって補わねばなりません。

そして、その努力の中で目ざすところは「信徒各自が、いつそう真のキリスト者になるよう」励むべきだということにあります。そのため、

(1) 各自は、自らの福音化をめざし、聖書を読み、黙想研修等を通して自己啓発につとめましょう。

また、福音の精神にのっとり、社会との真剣なかかわりを持つよう励みましょう。

さらに、生活に根ざした祈りと秘跡を重ねて大切にしましょう。

(2) 青少年については次のように考えます。

成人信徒は、青少年の自由な、可能性に富んだ、主体的な成長を助けるべきだと思います。

家庭にあつては、より真剣にお互いを大切にしましょう。

教会においては、ただ青少年を集めることだけにこだわるよりも、共にキリストに出合う努力が肝心であります。青少年のみなさんにお願ひします。

あなた方は、自分自身が福音の精神をもって、教会と社会に積極的にかかわるよう努力してください。

また、まわりで真剣に福音的に生きている人々から学び、主体的に、キリストにおける自己刷新を深めてください。

(3) 司祭、修道者への召命の恵みは、このような福音の実現の努力の上に、神ご自身が必ず準備してくださるものと確信いたします。

特に青少年が、自分を喜んで主に捧げた生き方をしている司祭、修道者に出会って、目ざめる体験は、貴重な召命への動機となり得るでしょう。

さらに、召命の芽を育てる積極的な助言や、教区司祭、各修道会について知る機会を持つことは、重要かつ有益なことであります。

結び

自己刷新に励みながら、社会とともに歩んでいくためには、教会としても、個人としても、まだまだ考えねばならぬことがほかにも、数多くあるでしょう。

しかし、とにかく、短期的なビジョンとして、ここ二、三年、その具体的な取り組みを始めたと思います。

先に本文で述べましたことは、まさにその方向性を取り組み方を示したにすぎません。これからがとても大切だと思います。それは、このビジョンにしたがって、いかに具体化させるかという問題が残されているからであります。

それは各小教区、各グループとして、また教区全体として、その具体化をはかるといふ願いをもっているからであります。

先ず、教区としては、福音の心をもって「弱い立場」の人びとのことをもつと正しく知り、関わりを深めるために、各々からの協力を得ながら、教区内の現状を調査し、その実態を把握したいと思ひます。各小教区、各グループにおいても、これら具体化のための努力を期待いたします。

各方面の、いろいろな具体化の試みはその都度、教区の交流の手段である教区時報を通じて、紹介し、それを参考にし、お互いに調和を保つていただくようお願いしたいと思います。

そこで、この調和を保つために、まず、このビジョンにしたがつて、各グループの年間行事の見直しをはかっていたいただきたいのであります。

しかし、これは何も画一化したり、各グループの自発的な活動を束縛するものでは決してありません。

次に、実践にあたって特に注意しなければならないことは、同じ線路の上をみな同じスピードで走らねばならない、その速度や方向に合わない人はみな間違っている、という不寛容な精神に陥らないようにすることです。

共通の目標を過ぎしながら、その取る道は、互いに違ひうるでしょうし、早く歩ける人もあれば、ゆっくりしか歩けない人もあることを考慮しなければなりません。できるだけ互いに理解し合い、協力し合うとともに、他人の取り組み方を尊重する精神を持ち合わせねばなりません。そこには、いわゆる真の対話の精神が要求されるわけです。

そこで、私たちの目は常に、最終目標、中心課題に向けられていなければなりません。その見る方向がしっかりしており、神秘的な一致の精神が深く私たちの心に根づいているならば、そういった分裂のおそれはなくなるであります。私は、みなさんから寄せられた、またみなさんの願いと祈りをこめて作られたこれらのビジョンのまとめを、聖霊に導かれた大きな恵みとして、受け取りました。

私たちは、あたかも山の頂上を見上げるかのように、三位一体の神、神の国を見上げ、その根本的福音の呼びかけに耳を傾け、それにこたえるために、社会とともに歩む教会づくりを目ざすことを決心いたします。

この発表を閉じるにあたり、みなさんが示された誠意と熱意を心から感謝するとともに、今後、キリストの霊に動かされて努力されることを期待し、祈り、その努力を祝福するものであります。

もし、私たちの努力が、自己流のものではなく、キリストの霊に動かされたものであるならば、そこには希望があり、力があり、聖霊の支えがあります。

神のお望みのままに、お望みの通りに、お望みにしたがって世界を刷新し、聖化する大きな務めが、私たちに与えられております。社会の中にすでに生き働いておられる主に従って、社会に真の平和と、真の幸福を伝えていく使命が、私たちに与えられております。

願わくは、主イエズス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、私たちを祝福し、私たちの行く手を明るく、さし示してくださいませように。

一九八一年十一月二十三日

京都教区創立四十四年目にあたって

京都司教 ライムンド 田中健一